

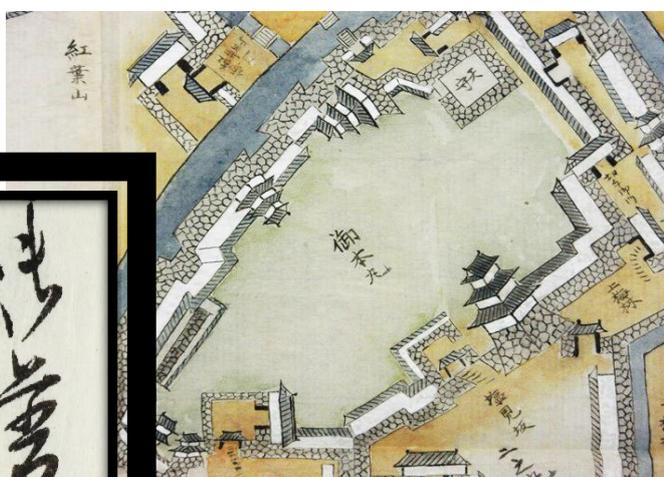
平成30年度夏季展

加賀藩と公儀普請 —江戸城・大坂城修築等—

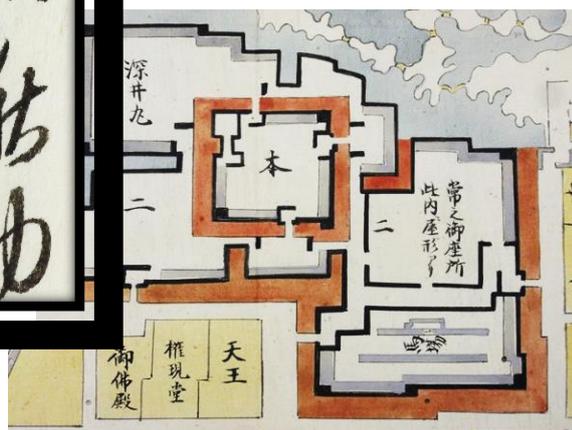


「江戸御上屋敷惣御絵図 大坂城図」
(18.6-27-3)青屋口部分

「江府天守台修築日記」(16.21-27)



「江戸城絵図」(090-1355-92)本丸部分



「諸国居城之図集 尾州名護屋城図」(098.6-66-16)部分

平成30年

7月10日(火)

～9月9日(日)

金沢市立玉川図書館

近世史料館

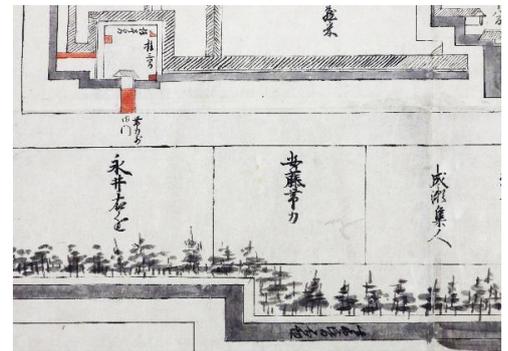
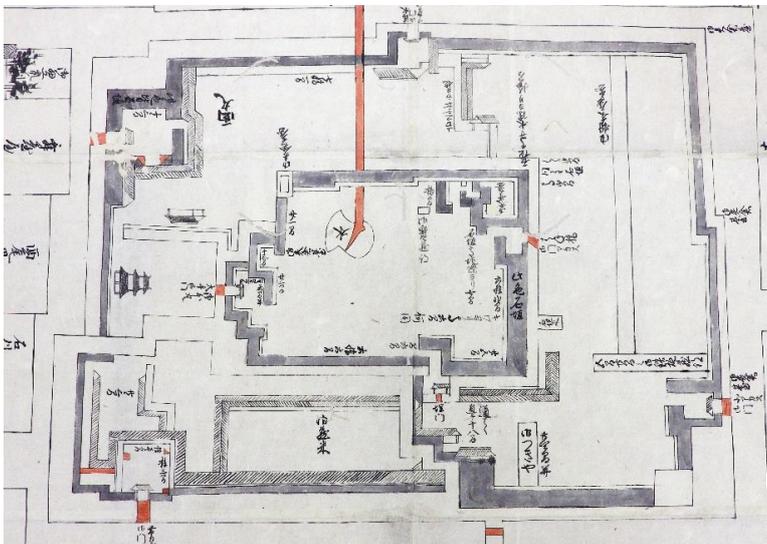
はじめに

近世において、全国で数多くの城郭が築かれました。前田家の居城としては、金沢・小松・高岡・富山などが挙げられます。その一方で、大名個人の城郭とは異なり、幕府の城郭を築城・修築するために、諸大名が動員されました。これを「公儀普請」(または「天下普請」・「御手伝普請」)といいます。公儀普請は重要な軍役の1つであり、諸大名にとって、幕府への忠義と課役の負担は、御家(藩)存続をかけたものでした。また、幕府にとっても、国家事業成功のため、いかに諸大名を動員させるかが、重要課題だったといえます。

本展示では、近世初期・前期に加賀藩が動員された、江戸城・大坂城普請を中心に、加賀藩の動向を文書・絵図で紹介します。

1. 慶長12年 駿府城修築

慶長10年(1605)、徳川家康は將軍職を嫡男の秀忠に譲り、隠居して大御所となりました。家康が駿府に移るにあたり、同12年3月に前田利常・毛利秀就(長門萩)・池田輝政(播磨姫路)などが二の丸石垣普請に動員されました。同年7月に天守閣も完成しますが、その直後の火災により天守・本丸御殿が焼失しました。翌13年3月に再び修築され、大御所家康の居城となりました。

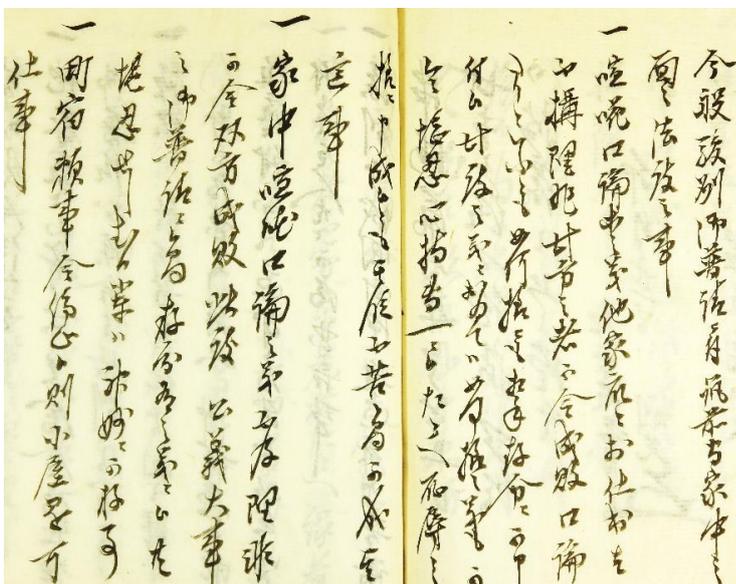


(史料1)「駿府城之図」(16.84-183)部分
本丸・二の丸部分(左図)。

三の丸部分(上図)には、家康大御所時代より駿府に詰めた成瀬隼人(正成)・安藤帯刀(直次)・永井右近(直勝)などの屋敷が描かれ、慶長～元和頃の様相を描いたものと考えられます。

(史料2)「加藩国初遺文」七(16.28-74-7)

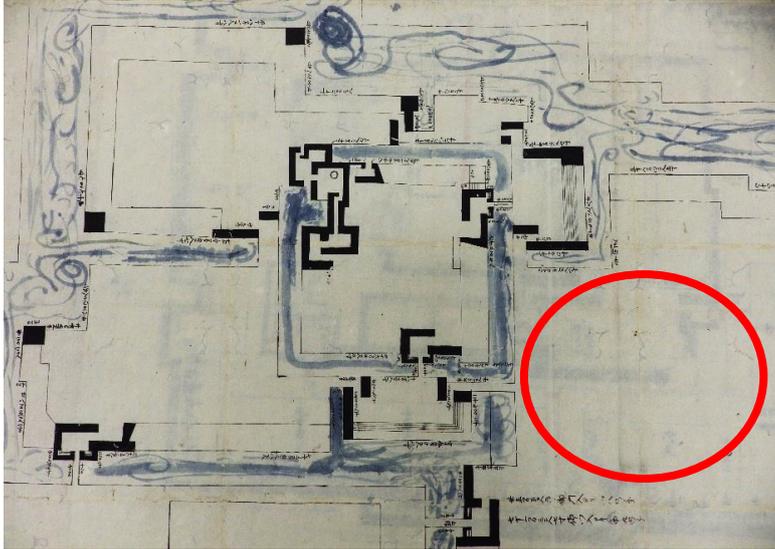
慶長12年(1607)5月13日、駿府城修築の命を受けた先代利長は、3代利常を派遣しました。これは、利常に追従する家臣への掟書です。他家の者との争いには当家側を成敗すること、町宿ではなく普請小屋で生活すること、酒は京盃3杯までとすることなど17ヶ条が記されており、普請現場での家臣の規律を定めました。



- 今般駿州御普請二付、筑前守(前田利常)家中之面々法度之事
- 一、喧嘩口論等之義、他家衆と於仕出者、不構理非此方之者可令成敗、口論たりといふとも、如何様二も相手存分二可申付候、此度之義二おめてハ、如何様之義も可令堪忍心持專一二候、たとへ恥辱之様二申成候とも、其段不苦候間、可成其意事
- 一、家中喧嘩口論之義、不及理非可令双方成敗、此度公儀大事之御普請二候間、存分有之義二候共、堪忍せしむる輩ハ神妙二可存事
- 一、町宿頼事令停止候、則小屋懸可仕事

2. 慶長15年 名古屋城築城

慶長15年(1610)2月、大御所家康は徳川義直(家康9男)のために、諸大名に名古屋への築城を命じました。この時、前田利常・黒田長政(福岡)・加藤清正(熊本)・福島正則(広島)などが動員されました。同年9月に完成し、町割の完成を経て、尾張藩の居城となりました。加賀藩では、利長の隠居城の高岡城の整備が進められていましたが、名古屋城普請と重なり、高岡城整備の進捗に影響が出たとされています。

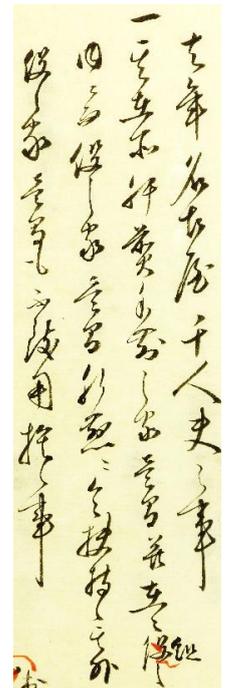


(史料3)「尾州名古屋城之図」(16.84-186)部分
慶長15年(1610)の普請時を描いたとされています。二の丸(丸加筆部分)や本丸の普請が行われました。

(史料4)「当摩氏文書」(16.34-39)

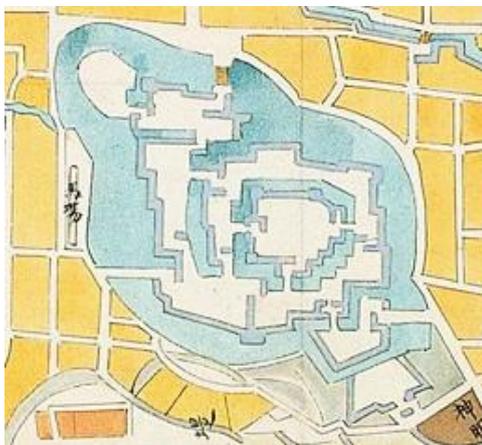
加賀藩は名古屋城普請に、村々から人足1,000人以上を動員しました。普請完成翌年の慶長16年(1611)2月に、人足派遣を斡旋した各郡の村に賞与についての規定の触を出しました。岡島一吉などが鹿島郡の村々に宛て、人足の割当などを命じています。

去年名古屋千人夫之事
一、其在所肝煎手前之家吉間、並在々組之内二而役之家吉間、肝煎二令扶持候、其外役之家吉間も不致用捨候事



3. 慶長19年 高田城築城

慶長19年(1614)3月、大御所家康は松平忠輝(家康6男)のために、越後高田城への築城を大名に命じました。縄張は伊達政宗(忠輝の舅。仙台)が担当し、前田利常・上杉景勝(米沢)・佐竹義宣(秋田)など北国・奥州の諸大名が動員されました。同年7月に三重櫓を中心に完了しましたが、豊臣家対策のために早急に築かれ、石垣ではなく土塁を採用しました。以降は、酒井・稲葉・戸田家など大名が目まぐるしく替わる越後高田藩の居城となりました。



(史料5)「越後高田城図」
(098.6-66-100)部分

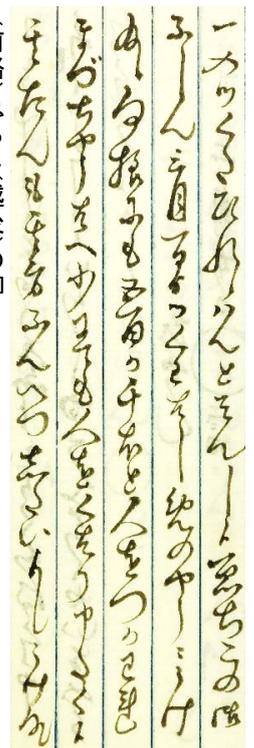
加賀藩兵学者の有沢永貞の「諸国居城之図集」より。寛文～元禄年間に編纂されました。

(史料6)「本多家古文書等」二 (16.34-58-2)

慶長19年(1614)2月20日に利長から本多政重に宛てたもの。普請着手の命を受けて、利長は普請場に人足500人から1,000人を派遣するように命じ、指物などを用意させたいとしています。幕府と豊臣家との不穏な情勢から、油断無く、精を入れるよう厳命しました。

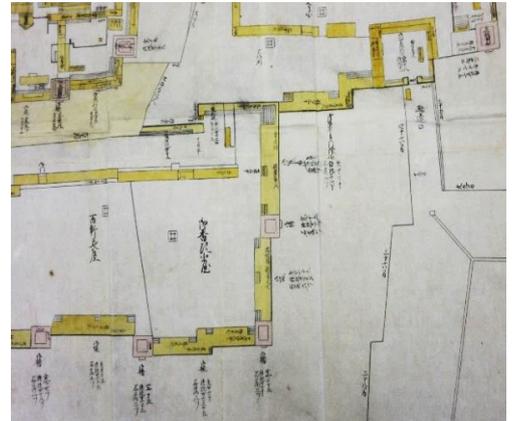
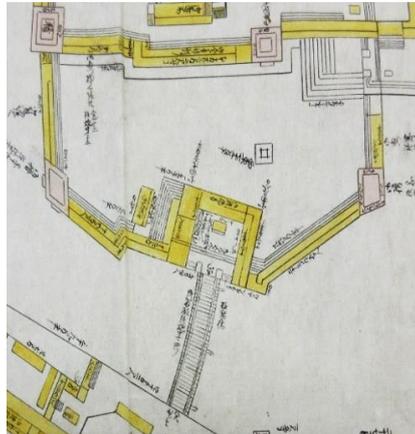
この時期の加賀藩では、同年正月にキリシタンで加賀藩客将の高山右近の国外追放が決まり、同年5月には利長が死去しました。

(前略)多(ち)二(越後)の御
ふしん三月一日方御くわはしめ(御初)のやう二うけ
給候、何様にも五百か千ほど人をつかわれ、
まづちやうは(丁場)へ少にても人をくはり(配り)申たく候、
其たん(段)も其方ふんへつ(分別)したい(次第)よし(後略)



4. 元和6年～寛永5年 大坂城修築

慶長19年(1614)から翌20年の大坂の陣によって、豊臣秀吉の築いた大坂城は焼失しました。幕府は元和元年(1615)に天領として大坂復興に着手し、元和6年から8年を費やし、大坂城再築普請をおこないました。北国から九州に至るまでの大名が動員されました。元和6年の第1期では二の丸外堀(玉造口は除く)、寛永元年(1624)・翌2年の第2期では本丸内堀、同5年の第3期では二の丸南外堀(玉造口)の普請が命じられました。

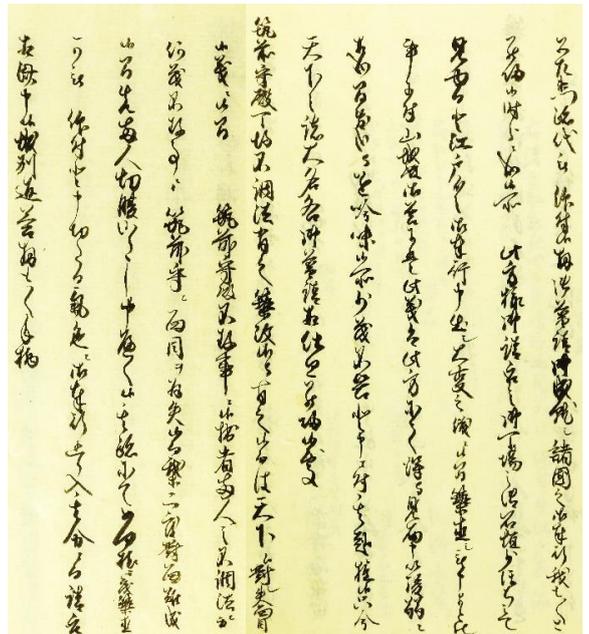


(史料7)「大坂城図(江戸御上屋敷惣絵図)」(18.6-27-3)部分

加賀藩は、第1期に青屋口方面(左図)、第2期に山里丸方面(中央図)、第3期に玉造口方面(右図)を担当しました。

(史料8)「文禄年中以来等之旧記」(19.9-62)

文政8年(1825)の後藤彦三郎の著。彦三郎は、石垣技術集団の穴太(あのう)衆後藤家6代。元和6年(1620)の第1期普請が終了した後、加賀藩普請奉行の横山長知(ながちか)・本多政重は、幕府側奉行から担当丁場の石垣のずれを指摘され、築き直すように命じられました。それに対し、横山は「主君利常が面目を失うため、横山・本多が切腹する」と申し出ました。幕府側は困惑し、そのまま丁場を引き取った一件があったとしています。この一件は加賀藩穴太衆の準備不足が原因と記しています。



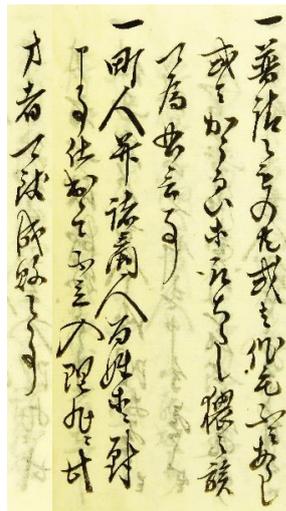
(史料9)

「加藩国初遺文」十二

(16.28-74-13)

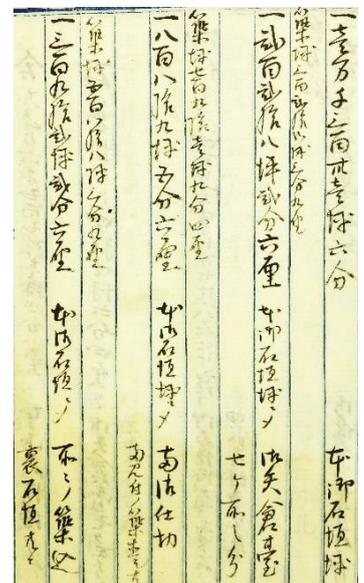
寛永5年(1628)の第3期普請では、加賀藩は玉造口を担当することとなり、同年2月2日に利常は、普請に臨む家臣に掟書を定めました。田畑を荒らすのを禁止すること、大坂の町人・商人・百姓と争いがあれば、理由を問わず、当家側を成敗することなど15ヶ条です。

- 一、普請之もの共、或者作毛ふみあらし、或者かうるい等取ちらし、猥之族可為曲言事
- 一、町人並諸商人・百姓等に対申事仕出候ハ、不立人理非二此方者可致成敗之事



(史料10)「本多氏旧記」一(16.34-57-1)

寛永5年(1628)の第3期普請における担当面積などを報告しています。土台の礎石の周辺に置く「狭間(さま)石」、石段などに使用する「雁木(がんき)石」などの使用面積も書かれています。4組に分かれ、加賀藩は第2組頭となり、組内役高116万石分の内100万石分を占めました。



5. 寛永13年 江戸城修築

寛永13年(1636)に幕府は諸大名に江戸城の外郭修築普請を命じました。北国から九州の大名(加賀藩前田家・熊本藩細川家など)は石垣積、奥州から関東の大名(仙台藩伊達家・庄内藩酒井家・七日市藩前田家など)は堀の掘削を担当し、合計120家の動員とされています。大御所秀忠は同9年に没しており、3代将軍家光による単独政権下での普請発令でした。

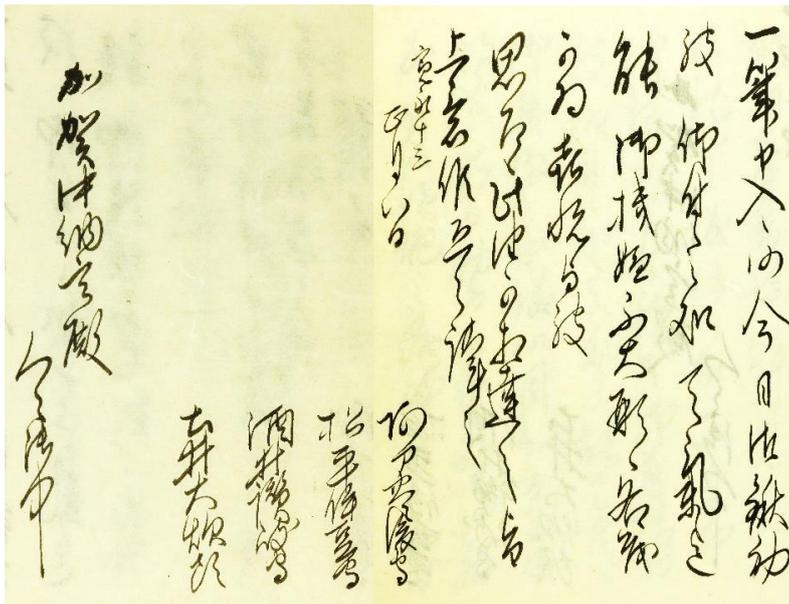


(史料11)「江戸城之図」(16.84-172) 神田・水道橋方面

安永4年(1775)3月の高島厚定の写。寛永13年(1636)の江戸城普請では升形修築もおこなわれ、御成橋・虎門・赤坂・市ヶ谷・牛込・小石川・浅草などが着手されました。加賀藩は筋違方面を担当しました(丸加筆部分)。

(史料13)「寛永間古文書写」(16.28-108)

寛永13年(1636)正月8日、老中の阿部忠秋・松平信綱・酒井忠勝・土井利勝から利常に宛てたもの。この日が鉄初となりました。



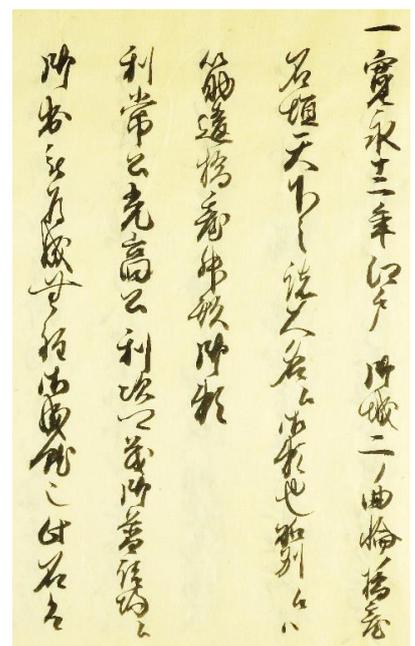
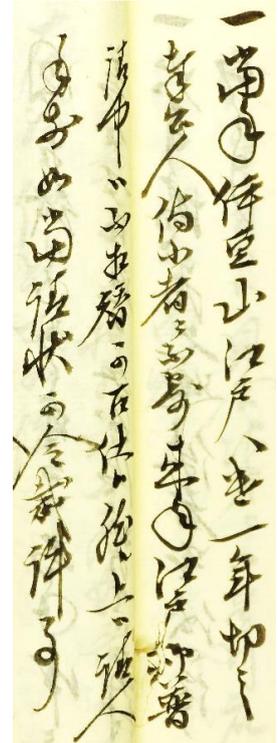
(史料14)「古伝書」(19.9-97)

寛永12年(1635)に江戸城二の丸橋台の石垣普請が完了した翌年、外郭修築が開始されました。利常(加賀藩先代)・光高(加賀藩4代)・利次(富山藩初代)も普請場に赴いていたことを記しています。

(史料12)「加藩国初遺文」十三(16.28-74-14)

寛永12年(1635)8月26日に、横山長知(ながちか)・本多政重の連名で、加越能の宿高札に記されたもの。伊豆・江戸へ派遣する奉公人についての掟書です。「伊豆山」は江戸普請の石切場で、「江戸」は普請場のことを示しています。

一、当年伊豆山・江戸へ遣一年切之奉公人、侍・小者不寄、来年江戸御普請中八不相替可召仕候、然ル上八請人手前、如当請状可令裁許事



6. 万治元年 江戸城修築

明暦3年(1657)正月の明暦大火によって、江戸城下は火の海となりました。江戸城も天守を含め、外堀から内側が焼失し、加賀藩・七日市藩の辰口(たつのくち)邸も類焼する被害を受けました。幕府は城下復興を進めると共に、同年2月に譜代大名の牧野忠成(越後長岡)・阿部定高(武蔵岩槻)などが石垣普請を担いました。次いで、翌年3月に本丸修築が外様大名の前田綱紀・真田信政(信濃松代)などに命じられ、大手門台・蓮池門台などの石垣が、万治元年(1658)9月に修築されました。加賀藩は天守台修築を手掛けました。

(史料15)「江戸城絵図」(090-1355-92)
(本丸部分)

万治元年(1658)9月に江戸城天守台などの修築が完了しましたが、城下復興も重要課題とする保科正之(5代綱紀の舅。3代將軍家光の弟)の提案によって、天守までは再建されませんでした。天守台は現存しています(丸加筆部分)。



(史料16)「江府天守台修築日記」(16.21-27)

明暦3年(1657)9月の普請動員命令を受けてから、万治元年(1658)9月までの普請経過が記されています。また、普請場での入用銀目録、普請中の慰労のための下賜目録もあります。

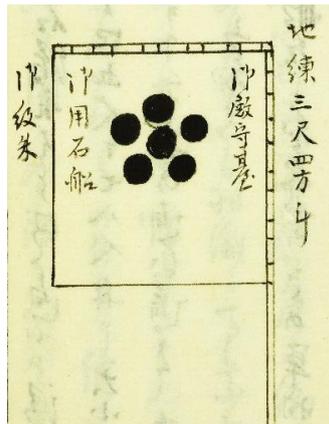
なお、綱紀の後見として江戸へ同行していた利常は、帰国後の10月に没しました。

一、明暦三年九月廿七日、御殿守台石境御普請、松平加賀守様へ被仰付、即刻御登城被成御請被仰上、則翌年三月十四日方御普請初、同九月廿六日令成就、廿七日御普請御奉行衆へ御渡被成候事

一、明暦三年九月廿七日、御殿守台石境御普請、松平加賀守様へ被仰付、即刻御登城被成御請被仰上、則翌年三月十四日方御普請初、同九月廿六日令成就、廿七日御普請御奉行衆へ御渡被成候事

(史料17)
「江府天守台修築日記」
(16.21-28)

(史料16)の写。石材を船で波外場まで輸送した際の船旗が描かれています。



一、松平加賀守様へ被仰付、即刻御登城被成御請被仰上、則翌年三月十四日方御普請初、同九月廿六日令成就、廿七日御普請御奉行衆へ御渡被成候事

一、松平加賀守様へ被仰付、即刻御登城被成御請被仰上、則翌年三月十四日方御普請初、同九月廿六日令成就、廿七日御普請御奉行衆へ御渡被成候事

一、松平加賀守様へ被仰付、即刻御登城被成御請被仰上、則翌年三月十四日方御普請初、同九月廿六日令成就、廿七日御普請御奉行衆へ御渡被成候事

(史料18)「江戸御普請二付私組下より出申御役人付帳」
(16.65-163)

万治元年(1658)閏12月、津田宇右衛門宛て。明暦4年(1658)9月の江戸城天守台普請の際に、鹿島郡有江村(現在の鹿島郡中能登町)藤右衛門組から江戸へ人足47人が徴発されました。彼らの現場所属、能登出発・帰国の日限が記されています。前田三左衛門(直之。土佐守家)組には13人が配属され、金沢からの荷物運送を担いました。加賀藩からは加越能で人足1万人を動員したとされています。

7. 近世初期・前期の公儀普請

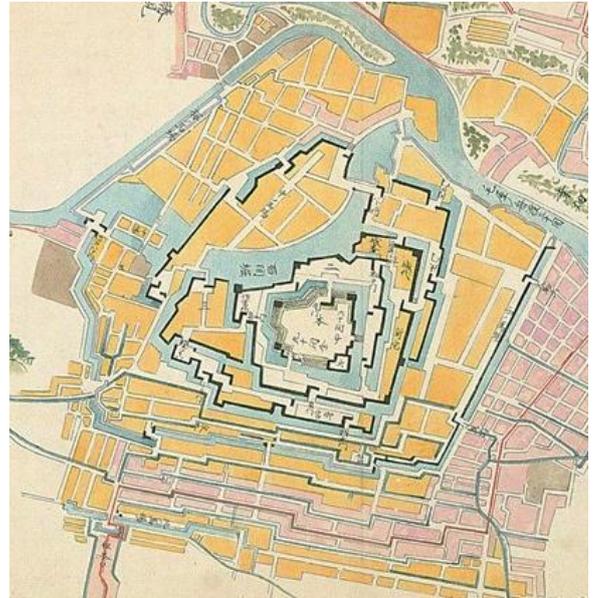
江戸幕府が開府する以前から徳川家は、諸大名を公儀普請に動員しました。加賀藩には動員がかからなかった以外にも、他多くの公儀普請が展開されていきました。

慶長期においては、豊臣家の動向を警戒する幕府は、彦根城・丹波亀山城・伏見城などの普請を命じ、西国警戒の拠点を整備していきました。

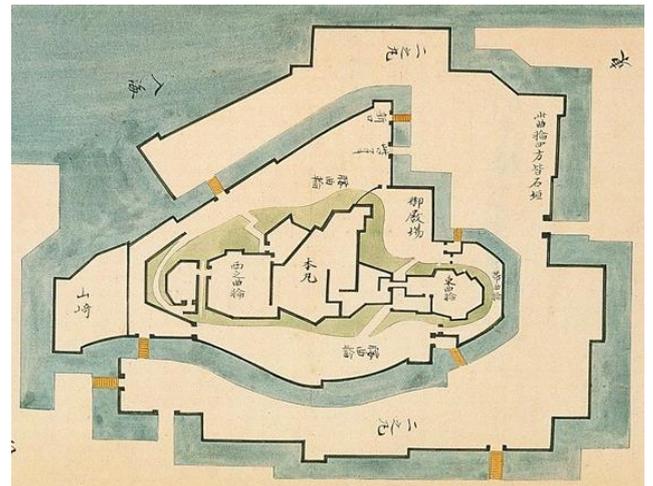
大坂の陣の後、元和期においては大坂城の復興に重点が置かれると共に、寛永期以降は江戸城の修築が度々おこなわれました。

年代	城名	普請箇所等
慶長6年(1601)	福井城	築城
	近江膳所城	築城
慶長7年(1602)	美濃加納城	築城
慶長8年(1603)	江戸城	拡張
	彦根城	築城
慶長11年(1606)	江戸城	石垣増築
	伏見城	石塁修築
慶長12年(1607)	江戸城	天守台修築
	駿府城	二の丸修築
慶長13年(1608)	駿府城	修築(慶長12年の火災復興)
慶長14年(1609)	丹波篠山城	築城
	丹波亀山城	築城
慶長15年(1610)	名古屋城	二の丸築城
慶長16年(1611)	江戸城	西丸堀修築
慶長19年(1614)	越後高田城	築城
元和4年(1618)	江戸城	紅葉東照宮造営・神田川開削
元和6年(1620)	江戸城	外郭修築
	大坂城	二の丸外堀(南側除外)再築
元和8年(1622)	江戸城	本丸殿閣・天守台改築
寛永元年(1624)	江戸城	西丸殿舎改築
	二条城	改築
寛永4年(1627)	大坂城	本丸内堀再築
寛永4年(1627)	江戸城	日比谷門・梅林坂門建設
寛永5年(1628)	大坂城	二の丸南外堀再築
寛永6年(1629)	江戸城	石垣修築(寛永5年の震災復興)
寛永10年(1633)	江戸城	西丸石垣修築
寛永12年(1635)	江戸城	二の丸拡張
寛永13年(1636)	江戸城	外郭修築
寛永14年(1637)	江戸城	本丸殿閣・天守台改築
寛永16年(1639)	江戸城	郭門建設、西丸石垣修築
寛永18年(1641)	江戸城	二の丸殿舎・石垣修築
寛永20年(1643)	江戸城	二の丸・三の丸石垣修築
寛永21年(1644)	江戸城	赤坂堀浚渫
正保2年(1645)	江戸城	物堀浚渫
正保3年(1646)	江戸城	西丸石垣修築
正保4年(1647)	江戸城	石垣修築(正保4年の震災復興)
慶安2年(1649)	江戸城	石垣修築(慶安2年の震災復興)
慶安3年(1650)	江戸城	西丸石垣修築(慶安2年の震災復興)
承応2年(1653)	江戸城	天守台修築(承応2年の雨災復興)
明暦3年(1657)	江戸城	修築(明暦大火による復興)
万治元年(1658)	江戸城	本丸・石垣・天守台修築
万治3年(1660)	江戸城	竹橋石垣多門修築

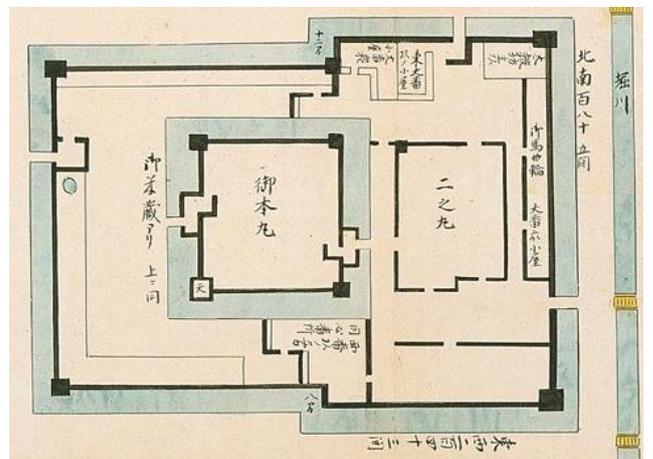
※『大日本史料』・『東京市史稿』を参考に作成。太字箇所は加賀藩参加普請。



(史料19)「諸国居城之図集 越前福居城図」
(098.6-66-93)部分



(史料20)「諸国居城之図集 江州彦根城図」
(098.6-66-47)部分



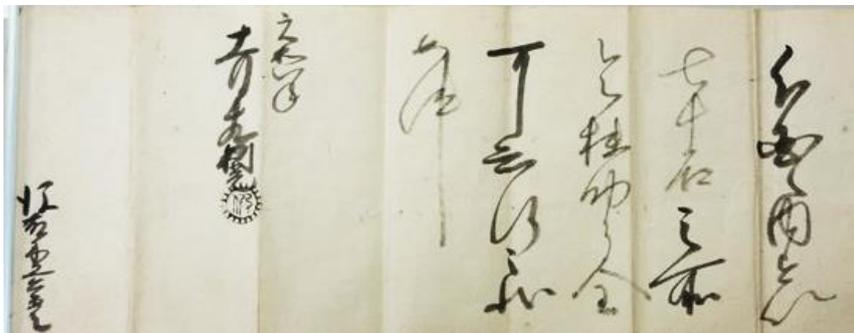
(史料21)「諸国居城之図集 城州二条城図」
(098.6-66-1)部分

8. 石垣普請集団 後藤家

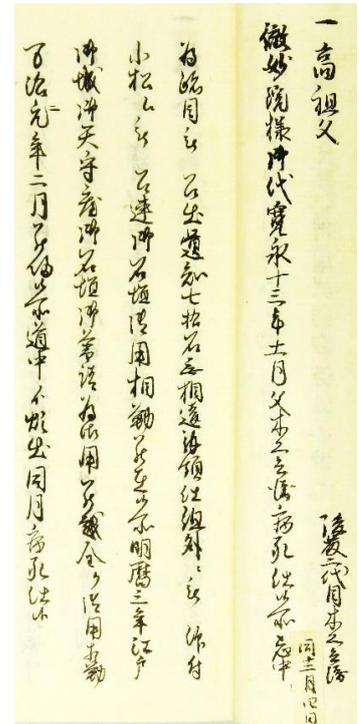
全国には穴太(あのを)と呼ばれる石垣職人がいました。諸大名は彼らを召し抱え、城郭の石垣普請を行いました。また、諸大名は自らの城郭だけでなく、公儀普請にも彼らを動員させ、穴太の石垣技術で他家と競いました。加賀藩でも穴太家(後に奥家)・後藤家・戸波家などが召し抱えられました。特に後藤家の史料は当館の「後藤文庫」(特19)として、金沢城下に活かされた石垣技術書などが伝来しています。



(史料22)「篠原出羽守知行書」(19.9-6-1)

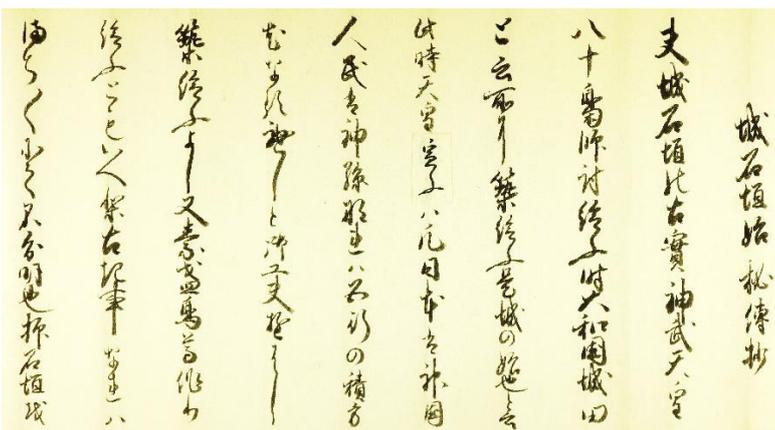


(史料23)「前田利常知行書」(19.9-9)

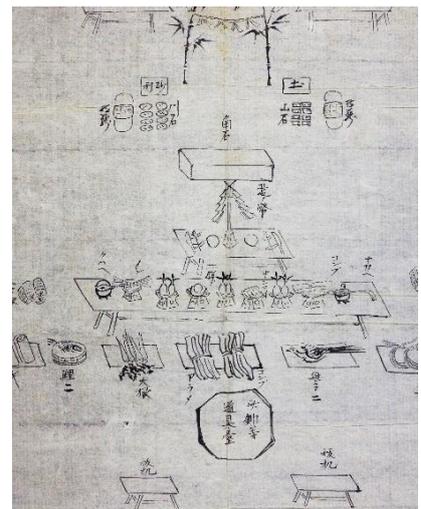


(史料24)
「先祖由緒一類附帳」
(19.9-1)

後藤家は、近江穴太(あのを)衆の出身ではなく、後藤又兵衛の弟を初代壱兵衛(彦八)としています。初代壱兵衛は慶長4年(1599)篠原一孝の家臣として100俵で仕え、元和8年(1622)に70石で利常の直臣となりました。2代壱兵衛の頃、明暦3年(1657)からの江戸城天守台普請に御石垣御用として従事しています。以降、歴代は金沢城・小松城石垣普請などに関わっていきました。



(史料25)「城石垣始秘伝抄」(19.9-90)



(史料26)「御鍬初祭式図」
(19.9-149-2)部分

<参考文献>

- 金沢城調査研究室『よみがえる金沢城1 -450年の歴史を歩む-』(石川県教育委員会、2006年)
- 金沢城調査研究室『よみがえる金沢城2 -今に残る魅力をさぐる-』(石川県教育委員会、2009年)
- 鎌田康平「加賀藩と公儀普請—大坂城再築普請をめぐる幕藩関係—」(『加能地域史』61号、2014年)
- 木越隆三「初期金沢城の造営体制と割普請」(『金沢城研究』13号、金沢城調査研究所、2015年)
- 北原糸子『江戸城外堀物語』筑摩書房、1999年
- 城戸久『名古屋城と天守台建築』名著出版、1981年

※展示とパンフレットの史料は若干異なる場合があります。